

公表用論文要約

(勝又泰洋)

ピロストラトス『テュアナのアポッローニオス』の文学的研究

本論文は、ローマ帝政期のいわゆる「第二次ソフィスト思潮」（英語圏では *Second Sophistic*）のなかで活躍した著述家ピロストラトス（後 170～249 頃）による『テュアナのアポッローニオス』を文学研究の観点から分析したものである。本作は、2022 年に新しい校訂本が出版された（校訂者はオランダの学者 Gerard Boter）ことに象徴されるように、近年、これまでにないほど批評家たちの注目を集めるようになった。日本語による本格的な研究は皆無であるがゆえ、本論文はその草分け的存在として位置づけられうる。

この作品は、紀元後 1 世紀のカップドキア（小アジアの一地域）で活動していたとされる伝説的哲学者アポッローニオスの言行を読み物風にまとめたもので、この人物が生まれたときからこの世を離れる（「死ぬ」わけではない点に注意）ときまで、基本的には時系列に沿って中身が語られていく。その中心をなすのは、アポッローニオスがダミスという男を筆頭とした弟子たちとともに実施した大規模旅行の描写で、彼は、ギリシア本土やイタリアはもちろん、インドやエチオピアといった場所にまで足を伸ばし、それぞれの土地の有力者と交流をする。読み手（想定されているのは、「教養人」*παιδευμένοι* として括られうる知識層）は、過去の偉人たちの行動や言葉がさまざまな仕方でも混ざり合う不思議な世界に誘われることになる。

この内容から推測できるように、「歴史フィクション」とみなされることもある本作については、およそ 100 年ほど前よりその内容が事実なのか虚構なのかをめぐる数多くの議論が重ねられてきた。しかし本論文はこのアプローチとは一線を画し、わずかな研究（Lo Cascio (1974)、Knoles (1981)、Kanavou (2018) が重要で、この 3 つについては後述する）によって散発的になされてきた文学的考察を範にとる。そして、これらの先行研究では触れられていない問題、もしくは十分に掘り下げられていない問題を取り上げることで、「文学作品」としての本作の理解を前進させることを目指す。

分析のキーワードとなるのが、「ナラトロジー」（*narratology*）と「間テキスト性」（*intertextuality*）である（ただ、本論文は、関連の理論的語彙を多数駆使して作品分析をおこなうというよりは、両理論の基本的な発想を大まかにとらえて作品解釈に応用するというスタンスをとる）。この 2 つの理論が柱となり、本論も 2 つの部に分かれる。「語りの特徴」と題された第 1 部はナラトロジーにかんする 4 つの章から構成され、「他著作との接点」と題された第 2 部は間テキスト性にかんする 3 つの章から構成される。この 7 つの章の前後に序章と終章が付され、本論文は全体として 9 つの章から成る。以下、それぞれの章の要点を掲げる。

序章では、7 つの本章の前提となる事柄について説明がなされる。最初の確認事項は、『テュアナのアポッローニオス』が（最も一般的な意味での）「文学作品」であるということで、これは、あらすじ・ジャンル・成立背景を押さえることでただちに理解できる。先にも触れたように、本作は、アポッローニオスの生涯を辿るという目論見のもと、この人物が成人時に敢行した世界旅行について記述することを主軸に据える。ゆえにジャンルは「伝記」と「旅行記」の融合ジャンルであるわけだ

が、この 2 つはともに長年月にわたるギリシア文学の伝統によって形成されたものである。また、本作の成立の背景には、「第二次ソフィスト思潮」と呼称される文化思潮が存在しており、この中で活躍したソフィストたちは、強い文学性をそなえた弁論を生み出すことを主な職務としていた。たとえばカイサレイアのパウサニアースという人物（生没年不詳）は、古典期の悲劇作家エウリーピデースの『ヘーラクレース』の一表現を文字るかたちで、自らの弁論に彩りを与えたと伝えられる。このような環境で仕事をしたピロストラトスもまた『テュアナのアポッローニオス』を「文学作品」として発表したはずである。以上を確認したあとは、古代の受容に目が向けられる。取り上げられるのは 2 人の「教養人」で、一人は後 4 世紀のソフィストのエウナピオス、もう一人は後 3 世紀のキリスト教の司教エウセビオスである。前者は、『テュアナのアポッローニオス』の内容を事実ととらえるのにたいし、後者は虚構とみなす。これを受けて次に行われるのは現代の先行研究の概観である。大きく 2 つのグループに分かれ、ひとつが（エウナピオスとエウセビオスの対立に比される）「事実か虚構か」の問題を扱うグループ、もうひとつが正統的な文学的分析を行うグループである。前者は Meyer (1917) や Grosso (1954) などが中心となって大きな流れを作り、後者は時間的に幅のある 3 つの研究がお互いに干渉することなく併存している。その 3 つとは Lo Cascio (1974)、Knolles (1981)、Kanavou (2018) で、これらは「事実か虚構か」のグループとは距離を置き、形式的な特徴、物語の提示法、頻出する概念の意味などに焦点を当てることで、本作を「文学作品」として評価することを主たる目的としている。本研究も、この 3 つの研究と同様、『テュアナのアポッローニオス』の「文学作品」としての特徴に注目し、その価値を見定めることを最重要の任務とする。

第 1 部「語りの特徴」では、複雑な仕掛けをもつ本作の語りにおけるいくつかの特徴がナラトロジーの側面から取り上げられる。第 1 章「語り手の情報の取り扱い」では、語り手による、アポッローニオス関係の情報の処理方法が論じられる。語り手は、自らの語りのなかで、情報源や情報伝達経路、また、情報の価値や情報の信頼度にしばしば言及するが、それらを総体として眺めてみると、数々の矛盾があることに気づく。この語り手は、序論部の 1.3 で、「正確」な情報が集められた、いわゆる「ダミス文書」を「書き換える」(μεταγράφει) ことを目標に掲げるわけだが、これが適切に遂行できないことに自覚的なようである。語り手は、「ダミス文書」にはそもそも遺漏があること、また、自身も「ダミス文書」の情報を恣意的に取捨選択して使っていることを暴露するのである。情報の提供にともなう困難をメタ的に笑い飛ばす、これが語り手をコントロールする作者ピロストラトスの振舞いと言える。ピロストラトスが遊戯性を好む人物であることは忘れるべきではない。

第 2 章「伝聞表現としての φασίς」では、「(3 人称・複数の主語が) 言っている」もしくは「(一般に多くの人に) 言われている」を意味する動詞 φασίς に焦点が当てられる。ピロストラトスは、情報の整理を得意とした作家であったようで、他の著作（具体的には『ソフィスト伝』『体育論』『絵画論』『英雄物語』『ネロー』の 5 つ）においても、自分の分身の語り手をして多かれ少なかれこの作業に従事せしめており、そのときにこの φασίς を頻用する。ただ、その使用法を比較すると、本作のそれには、他著作のそれには見られない違和感がついてまわる。比較対象の作品においては、φασίς の機能が明確である一方、『テュアナのアポッローニオス』における一部の φασίς は整合的な説明が難しい。しかしこれをピロストラトスの言語運用の不備のせいにするべきではない。丁寧に分析すると、この類の疑問を生む原因として、ピロストラトスの戦略的曖昧さが見えてくる。

第 3 章「語り手の物語介入」では、語り手が 1 人称の「私」として語りのなかに姿を見せるその

ありようについて考察がなされる。語り手は、基本的には外から眺めるかたちでアポッローニオスの言行の客観的叙述に専念するが、ときに 1 人称の代名詞や動詞をともなつて語りのなかに介入する。具体例を集めてみると、その介入の仕方には 3 つのパターンがある。「ダミス文書」以外の資料に言及するとき、物語の進め方を説明するとき、特定の話題について自身の見解を表明するとき、の 3 つがそれである。語り手は、1.3 で（「ダミス文書」を）「書き換える」という行為を強調するが、これは見方を変えれば語りのイニシアティブを占有したいという欲望のあらわれである。この語り手は、ダミスの言いなりでは決してなく、いわば「でしゃばりな編集者」である。3 種類の物語介入は、それぞれが語り手の自己顕示欲を示すものとなっている。

第 4 章「サスペンスの技法」では、本作に含まれるサスペンスの要素に注目し、その語られ方を明らかにすることを目的とする。本作を俯瞰的に見てみると、アポッローニオスの絶対的安全が確保された「基本的物語パターン」が繰り返し提示されていることがわかる。アポッローニオスは、訪問先の有力者（これを「上位者」と呼ぶ）と交流する際、最終的にかならず優位なポジションを獲得する。これは、相手がウェスパシアヌス、ティトゥス、ネルウァといったローマ皇帝の場合でも同様で、アポッローニオスが「神」のごとき存在となり、「人間」である皇帝たちを（比喩的な意味で）支配下に置く。ただ、このパターンは、同じローマ皇帝を「上位者」とする第 4 巻の「ネロー物語」と第 7・8 巻の「ドミティアヌス物語」では、強い揺らぎを見せる。主人公の勝利を期待する読み手を不安に陥れるような、アポッローニオスの危機的状況が作られていくのである。語り手は、このサスペンスを完成させるために、上手く計算をして物語要素を配置する。ネローとドミティアヌスは、ともに「哲学者嫌い」として知られ、読み手は、この二人によってアポッローニオスの命が危険にさらされる様子を目撃させられ、結果、冷静さを奪われることになるのである。

これに続く第 2 部「他著作との接点」では、本作が有する他著作との間テクスト的なつながりについて論じられる。第 5 章『イーリアス』との関係』では、第二次ソフィスト思潮の作家たちによって頻繁に利用されたホメーロスの『イーリアス』との関係性が取り上げられる。本作の方々に散らばった『イーリアス』の引用や引喩を集めて眺めてみると、エウポルボスとアキッレウスという 2 人の英雄の重要性がせり上がってくる。前者はピュタゴラス派哲学の「転生」の概念にかかわるという点で、後者はアポッローニオスが何よりも尊重する「知恵」（σοφία）の概念にかかわるという点で、軽視できない。この 2 人をめぐる記述を分析することで、アポッローニオスの人物的特性がより明確なものとして示される。同じホメーロスの『オデュッセイア』は、本作と横並びにしたとき、構造面で一致しているという意味で、マクロレベルで利用されているとみなせるが、『イーリアス』は、主人公（＝アポッローニオス）の造型に大きく貢献しているという点で、ミクロレベルで活用されていると考えることができる。

第 6 章「ギリシア悲劇との関係」では、前 5 世紀のギリシアの悲劇作品の利用法について考究がなされる。対象となるのは、ソポクレースの『オイディプス王』と『アンティゴネー』、そしてエウリーピデースの『ヒッポリュトス』である。前者の場合、アポッローニオスがテイレシアースおよびアンティゴネーと同一視されることで、彼の気概が強調され、後者の場合、エチオピアの若者ティーマシオンがヒッポリュトスと比較されることで、その清純さが際立たされることになる。いずれの場合においても、悲劇作品の登場人物がこれに対応する『テュアナのアポッローニオス』中の人物の個性に深みを与えるかたちになっているわけである。同時代のディオーン・クリューソ

ストモスやルーキアーノスと同様、ギリシア悲劇についてはピロストラトスも深い知識を有しており、表面的な利用だけでごまかすことはしない。たとえばティーマシオーンの造型法などを見ると、彼は、(ギリシア悲劇論の傑作である) アリストテレースの『詩学』すら自家薬籠中のものとしていた節がある。

第7章「ギリシア小説との関係」では、ダミスの人物造型に焦点が当てられつつ、本作と同時代のギリシア小説の関係性について考察がなされる。現存する「五大小説」(カリトーン『カッリロエー』、クセノポン『エペソス物語』、アキッレウス・タティオス『レウキッペーとクレイトポーン』、ロンゴス『ダプニスとクロエー』、ヘーリオドーロス『エティオピア物語』)には、「男主人公の友人」なる類型的な人物が登場するが、このキャラクターは、同じく「男主人公(=アポッローニオス)の友人」であるダミスの恰好の比較対象となる。ただ、両者の特徴を仔細に調べていくと、ダミスの特徴は小説の「男主人公の友人」のそれを反転させたものになっていることがわかる。ピロストラトスは、小説群の存在こそ知っていたようだが、ダミスを導入するにあたり、小説家たちの場合とはまるで異なる人物をつくることに尽力したのである。小説を読んでいたに違いない当時の『テュアナのアポッローニオス』の読者も、ダミスを創造したピロストラトスの才能に感服したことだろう。

終章では、7つの本章それぞれの主張が再提示されたのち、全体のまとめとして、「第二の」ソフィストとしてのピロストラトスの基本的性格と、本章で確認されたピロストラトスの営みとの結びつけが試みられる。物語の原データである「ダミス文書」が紹介される『テュアナのアポッローニオス』の1.3、『ソフィスト伝』におけるピリスコスなる人物をめぐる一節、『書簡集』の73番が同時に俎上に載せられるが、これらに共通して看取できるのは、当時の皇妃ユーリア・ドムナ(セプティミウス・セウェールス帝の妃)のソフィストのレトリックを擁護する姿勢と、この女性との近接性を強調するピロストラトスの戦略的自己表象である。ピロストラトスは、「あらゆるレトリックを尊重し歓迎していた」(1.3: τοὺς ῥητορικοὺς πάντας λόγους ἐπῆγει τε καὶ ἡσπάζετο) ユーリアに依頼されたという体で『テュアナのアポッローニオス』を作成したということになっているが、本論文における「語りの特徴」と「他著作との接点」の分析も、つまるところ、このソフィスト作家の(広い意味での)レトリックの諸相を対象とするものであった。